

Career Up Stage

ローマ帝国の繁栄からの教訓を紹介し
ます。キーワードは「誠実」と「寛容」です。正
攻法の取組で金中スタイルを確立しよう。

ローマ帝国に学ぶ

ローマ帝国とは

世界の古代史のなかでも、最も有名なローマ帝国の始まりは、紀元前6世紀の初め頃で、ローマの地に建国した都市国家でした。当時のイタリア半島には、多種多様な民俗の諸植民市があり、ローマはそのうちの小さな国家のひとつでした。

紀元前27年。イタリア半島に誕生した小さな都市国家ローマは半島全域を征服し、やがて地中海全域を飲み込み巨大な国家「ローマ帝国」を形成しました。

ローマの誠実

ローマ帝国繁栄の要因は「誠実」であったことです。例えばローマは戦う際、正攻法の戦術を好みました。同じ年代に存在していた中国三国志の世界では、騙し合いが日常茶飯事であり、勝てば何をやってもいいのだという風潮がありました。しかしローマ軍においては敵国を騙して戦った記録は残っておらず、仮にそんな戦い方をしていたとしても、声高に主張しない文化があったのです。

「誠実」ということは、何事もごまかさないうことです。だからこそ何事においてもより良いものを作るために、不足しているところに気づき、補っていきけるのです。何かを取り入れる際、仮に他にもっと容易なやり方があったとしても、その時考える最善を尽くす

という思想がローマ人にはあったのです。

また、誠実さがあったから、他の国の技術を自国に取り入れ、洗練していくことができたと思います。ローマは自国独自で何らかの技術に長けていたわけではありませんでした。しかし、周辺諸国の優れたものを取り込み、さらにブラッシュアップして新しいものを作り上げていきました。

正攻法の勉強

テスト勉強に関しては、毎日の授業や課題提出をしっかりとやることを正攻法のやり方と言えます。それに対して、テスト直前の一時的な徹夜の勉強は奇襲戦法と言えます。

本当の実力がつく勉強のやり方は、やはり正攻法だと思います。

中学校時代、私の友人の父親は、テスト直前の徹夜勉強はさせなかったそうです。

その父親いわく「テストは普段の授業内容から出題されるから授業をしっかりと受けていれば徹夜しなくても大丈夫」と。

その友人の授業での集中力の高さは凄いものがありました。

勉強法に限らず、学校での活動や部活動においても、誠実に正攻法の活動をしていくことが、成績や実力の向上につながり、長続きもしていきます。

何事にも誠実に行動し、正攻法で対応する金中スタイルを確立していきましょう。

寛容なローマン

二つ目のポイントは、「寛容」さです。

ローマンには、失敗を許容する文化も主体性を強化していたと考えられます。特に、古代ギリシアと比べた時、その傾向は顕著です。ギリシアでは敗戦将軍になると、たとえ国に帰ったとしても良くて追放、下手すると処刑されてしまいます。だから、敗戦将軍はまず自国に帰りませんでした。

一方、ローマの場合はたとえ戦に負けてしまったとしても、暖かく迎え入れます。

ローマンの考え方は、「敗戦しただけで大変な社会的屈辱を受けている。だから次のチャンスを与えてやれば、雪辱を晴らしたい」という強い気持ちがモチベーションになり、今まで以上の力を発揮する」といったものが根底にあったと思います。

現在の学校教育では、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が行われています。生徒の主体性を育むためには、失敗を許容する「寛容さ」を持つことが必要だということが、古代ローマのあり方から学ぶことができます。

ローマンと 沖縄人の祖先崇拜

ローマンの誠実さの背景には、強い信仰心があったのではないかと考えられています。信仰心が強いということは、常に神々に恥じぬ振る舞いを心がけていたということです。そのマインドが誠実さにつながっていたのではないかと考えられます。

また、父祖の威風を大切に重んじ、父祖に恥じないように、それに勝る行いをしようという意識が強いこともローマンらしさです。

祖先崇拜への想いがあついとされる沖縄では、祖先の名を記して仏壇に安置する位牌は最も重要な信仰の対象とされます。

その信仰形態は、他県にはみられない独自の形式を以て受け継ぎ伝えられています。

私事ですが、仕事やプライベートな事で何か失敗や良くないことがあると、母親から「御願不足」と言われました。トートーメーへ線香をあげて、事あるごとに先祖供養を行っています。それは私の子ども達にもよく言い聞かせ実行させています。

ローマンの信仰心の強さと、沖縄人の祖先崇拜への熱い想いは似ているように感じます。古くから受け継がれた沖縄の風習や伝統文化を守り続けて、他県にはない沖縄人の良さや誠実さを受け継ぎ、発展させていきましょう。 参文:古代ローマに学ぶ組織論

魯迅の日本観

実は日本人は昔から古代ローマンと近い感覚を持っていたのだと思います。

例えば、1930年代、中国の思想家である魯迅が7年ほど仙台を中心に日本に滞在していた後、帰国すると「日本人の誠実さを中国人は学ばなければならない」と言っています。日中戦争が始まろうとしており、関係性が最悪だったにもかかわらず、この発言が出たということは、滞在中によっぽど強く感じたのだと思います。

もしかすると、最近社会で起こっている様々な不祥事は、当時の日本人の在り方が忘れられてしまっているが故に起きているものなのかもしれません。経済的合理性を求めただけでなく、日本人が本来持っていた誠実さを、今一度見つめ直す時かもしれません。

金城中学校の生徒の皆さんは、これからの努力次第で可能性が無限に広がっていると思います。一生懸命努力して優秀な成績を修めたとしても、高慢さや他人を軽蔑する態度を取っていると、良い成績は長続きしません。古代ローマンを見習って、日本人が本来持っている誠実な心で学校生活やこれからの人生を過ごしていきましょう。

ローマ帝国の衰退

ローマが衰退した理由は、様々な要因が複雑に絡み合い、その結果、ローマの体力を奪っていったというのが真実です。ただ、中でも主体性を支えていた「寛容さ」を失ったことが大きな要因ではないかと思えます。

ローマは当初から共和政を導入し、最初こそ身分の高い者にしか発言権がありませんでしたが、抗争を経て、徐々に一般市民の発言力は増していきました。ただ、晩年は皇帝権力が絶対なものになっていきます。

すると、市民の中の「自分たちでこの国を支えるのだ」という主体的な意識が失われていき、公職につきたがるローマ市民は減りました。公職者には高い給料が支払われたわけではなく、もともと、名誉や国家に尽くしているという気概で務めていたからです。

また、異民族が大量に押し寄せてきたことも「寛容さ」を捨てざるを得なくなった原因です。国が混乱する危険性があったのですが、とりあえずは受け入れました。しかし、ローマ人のなかには異民族の生き方・価値観を嫌悪する者も目立つようになり、全体として寛容性を失っていくこととなります。その結果、各地で小競り合いが起き、国力が削がれていきました。

参考文献:「古代ローマに学ぶ組織論」(本村凌二)

ローマ帝国といえば、隣国を征服して勢力を拡大させていった印象がありますが、吸収した国に対して、一方的に支配して自国の価値観を押しつけるようなやり方は好みませんでした。征服した先が持つ独自の言語や宗教、慣習などには干渉しなかったのです。各国の主体性を重んじながらも分割統治を実現させていきました。

また、個人の主体性を育むためには、「寛容さ」を持つということと、失敗を許容する文化が必要だということも古代ローマのあり方

から学べるポイントなのではないでしょうか。

今回お話を伺った本村凌二さんは、古代ローマ史研究の第一人者です。本村さん曰く、数ある歴史の中で繁栄から滅亡までの起承転結をこれほどまで完璧に見せてくれる国はローマ以外にありえないとのこと。その歴史を振り返ることで、現代社会にも活かせる学びがたくさん得られると語ります。そこで今回は古代ローマの歴史から学べる組織運営のあり方について伺いました。

——「誠実」であることがローマの繁栄にどのように関係しているのですか？

誠実さがあったから、他の国の技術を自国に取り入れ、洗練していくことができたと思っています。ローマは自国独自でなんらかの技術に長けていたわけではありませんでした。しかし、周辺諸国の優れたものを取り込み、さらにブラッシュアップして新しいものを作り上げていきました。

たとえば有名なアッピア街道。現在の技術に引けを取らない建築物だと言われていますが、もともとは土木建築技術が進んでいたエトルリア人から学びました。また、現在もヨーロッパをはじめ多くの国々の法律の根幹にあるローマ法も、もともとはギリシアの法律だったものをベースにローマ人が作り上げました。それも、ただ真似ただけではなく、具体的な事例に適用させつつ、法学者同士が議論をしながら、判例集のような形で練り上げていったと言います。

「誠実」であるということは、あらゆるものをごまかさないということ。だからこそ何ごとにおいてもより良いものを作るために、不足しているところに気づき、補い、洗練していけるのです。何かを取り入れる際、仮に他にもっと容易いやり方があったとしても、その時考える最善を尽くすという思想がローマ人

にはあったのではないかと思います。

誠実さの背景には、強い信仰心があったのではないかと考えています。その信仰心の強さについては多くの歴史家、哲学者が言及しています。例えば紀元前1世紀頃、ローマの政治家であり哲学者であったキケロ。また、その150年ほど前には、ギリシア人で、ローマに20年以上抑留されていた歴史家、ポリビオスも言及しています。信仰心が強いということは、常に神々に恥じぬ振る舞いを心がけていたということ。そのマインドが誠実さにつながっていったのではないかと考えられます。

また、父祖の威風を大切に重んじてきました。それは父祖に恥じないように、またはそれに勝る行いをしようという意識が強いこともローマ人らしさです。

さらに、キリスト教が浸透していったことも寛容性が失われていった要因です。キリスト教が拡大した3世紀あたりは、国内が混乱しており、人々が救いを求めている時代でもありました。そんな風潮とマッチして、この新しい宗教はジワジワと広がっていきます。

キリスト教は、それまでローマにあった多神教とは対照的に一神教です。多神教の立場から見れば、どんな神様を信じるのも自由なのですが、それをキリスト教側は拒絶しました。そうすると自分たちの信じている神を否定されるわけですので、ローマとしては受け入れられるわけにはいきません。結果的に、キリスト教徒の反感を募らせてしまい、その対応に追われることになりました。

313年、皇帝コンスタンティヌスが「ミラノ勅令」により禁止されていたキリスト教を認める旨を国民に発表します。その後教会が権力を持ち始め、ますますその勢力を伸ばしていくことになりました。キリスト教は他の神様を認めないという点で、寛容性の低い宗教であると言えます。だからこそ、キリスト教の人口が増えていったということは、当時の

ローマ人の寛容な性質がどんどん変化したことにも繋がります。

寛容性が失われた結果、市民の主体性が損なわれ、国の内外で小競り合いが増え、395年にローマは東西に分裂します。その後、西ローマ帝国は476年に滅亡。東ローマ帝国は15世紀にオスマン帝国に侵攻されるまでビザンツ帝国として生き延びますが、それはもはや「ローマ」といえる国ではありませんでした。ですから、ローマが滅んだのはいつなのかという問題には議論の余地がありますが、私は西ローマ帝国が滅亡した時期をローマが滅んだ時代だと考えています。

現在もヨーロッパをはじめ多くの国々の法律の根幹にあるローマ法も、もともとはギリシアの法律だったものをベースにローマ人が作り上げました。それも、ただ真似ただけではなく、具体的な事例に適用させつつ、法学者同士が議論をしながら、判例集という形で練り上げていったと言われています。

参考文献:「古代ローマに学ぶ組織論」(本村凌二)